

スポーツに対する態度が学生の スポーツ学習効果に及ぼす影響

How the Student's View of Sports Affects Their (Sports) Learning

長野 孝 男

緒 言

大学の設置基準の大綱化がさげばれるなかで、大学体育のあり方が問われその必要性が論じられている現状にあって、過去に実施されてきた体育は、身体運動を通じた教育という学校教育の枠の中の柱として位置づけられた狭義の意味あいが強かった。

しかし、今や学校体育は生涯スポーツの一環として位置づけられようとしている。

スポーツがわれわれ人類に与える影響力は大である。スポーツは、体力づくりという生理的、解剖学的な効果を与え、私たちに精神的、社会的な成長を与える。また、その活動を通し快感や充実感を与えてくれる。このようにスポーツの効果は、数えきれないほど多くのものを私達人間に与えてくれる。

しかし現在実施されている学校体育において生涯スポーツを意識した指導が実施されていないのが現状である。スポーツの効用を科学的に理解し、各人が生活の中にスポーツを適切にとり入れることができれば、健康で幸せな生活を送れるようになるのではなからうか。

筆者らは、「女子学生の体力格差から見た体育、スポーツに対する意識構造の相違」¹⁾について発表を終えているが、体力が優れている者ほど体育、スポーツが好きで、体力が劣っている者ほど体育、スポーツが嫌いだという結論を得ている。

このように、体力格差によってスポーツに対するとらえ方が異なることを明らかにしたが、本研究においては、先行研究で得ることが出来なかった、スポーツに対する態度が、何時頃から学生たちの心に芽生え、誰れの影響によってそうした意識が形成されたのかを明らかにしようとした。

またそうしたスポーツに対する態度が学生の学習効果にどのように影響しているのかを検討しようとした。

今回、本学学生に対する調査の他に、さらに客観性を得るために他大学学生にも同調査を実施し、比較検討した。

I 研究方法

1. 調査期間： 1990年5月から6月（相愛大学）
1991年5月から7月初旬（他大学）
2. 調査対象： 相愛大学、1・2回生（女子）374名（有効回答率86.6%）
大阪府、奈良県に在籍する女子学生846名（有効回答率84.6%）
3. 調査内容： スポーツに関する調査を47項目よりなる用紙を作成し、アンケートを実施した。
それらの内容は、1）スポーツ好き嫌いについて、2）スポーツの好き、嫌いの理由、3）スポーツを好き嫌いにさせた者、4）スポーツと心身の調和的発達、5）スポーツと精神力の強化、6）スポーツと良い人間関係、7）スポーツと人格形成、8）スポーツと体力の増強、9）スポーツと健康の維持増進、疾病の防止等より構成されている。
4. 結果の集計： 集計にあたっては、大阪大学大型計算センターの S.P.S.S. (Statistical Package for the Social Sciences) プログラムによった。
また集計の一部についてはパーソナルコンピュータを使用した。

II 結果と考察

1. 女子学生のスポーツに対する態度

本学女子学生に、スポーツの好き嫌いについて調査した結果を、Table 1 に示した。
スポーツが「好き」とする者は、77.7%「嫌い」とする者は22.3%であった。

1991年に筆者らのグループが大阪、奈良の女子学生846名を対象に調査した結果は、「好き」83.9%、「嫌い」16.1%であった。スポーツ好きは学生が本学では数字の上で6.2ポイント少ないことになるが、大半の学生は他大学と同様、スポーツに対してポジティブな態度といえる。

Table 1 スポーツが好きか、嫌いか

	好 き		嫌 い		合 計
	N	%	N	%	
他 大 学	710	83.9	136	16.1	846
相 愛 大	372	77.7	83	22.3	372

2. スポーツの好きな理由、嫌いな理由

スポーツが嫌いである学生にその理由を聞いたところ、「スポーツが下手だから」(本学学生24.6%、他大学39.1%)が第1位であった。技術的な劣等感がスポーツに対するネガティブな態度として映っていることになった。

Tabel 2 スポーツの嫌いな理由

	相愛大		他大学	
	人数	割合	人数	割合
スポーツ技術が下手だから	20	24.6	63	39.1
体力がついていけないから	10	12.3	15	9.3
トレーニングが嫌だから	9	11.1	7	4.3
押しつけの授業だから	7	8.6	18	11.2
おもしろくないから	12	14.8	16	9.9
汗をかくのがいやだから	7	8.6	8	5.0
好きな種目をさせてくれないから	9	11.1	26	16.1
その他	7	8.6	8	5.0

(相愛大学81名、他大学161名)

Table 3 スポーツの好きな理由

	相愛大		他大学	
	人数	割合	人数	割合
スポーツ技術が上手だから	5	1.7	3	0.4
思いきりエネルギーを発散できるから	55	18.9	112	16.6
友達と自由にのびのびとやれるから	117	40.2	302	44.8
おもしろいから	60	20.6	133	19.7
汗をかけるから	19	6.5	39	5.8
好きな種目だから	28	9.6	58	8.6
ゲームが楽しいから	3	1.0	24	3.6
その他	4	1.4	3	0.4

(相愛大学291名、他大学674名)

スポーツが好きな学生は、「友達と自由にのびのびとできるから」(本学学生40.2%、他大学44.8%)、「思いきりエネルギーを発散できるから」(相愛大18.9%、他大学16.6%)という理由を示した。

彼女らはいずれもスポーツの効用を認め、それらを実践していることに興味を持てることである。すなわちスポーツ嫌いの学生は、スポーツを実施しても満足感を得られずに終り、スポーツ好きの学生は「友人とのびのびと」「スポーツを楽しむ」「自分の思うままにエネルギーを発散させ」満足感を得ていることが明らかにされた。

またスポーツ嫌いの学生は、それが大学入学以降に形成されたのではなく、既に幼児期や小、中、高等学校という長い期間にスポーツから逃げ出してこうした意識が形成されてきたものと推察される。

3. スポーツに対する態度とその形成時期

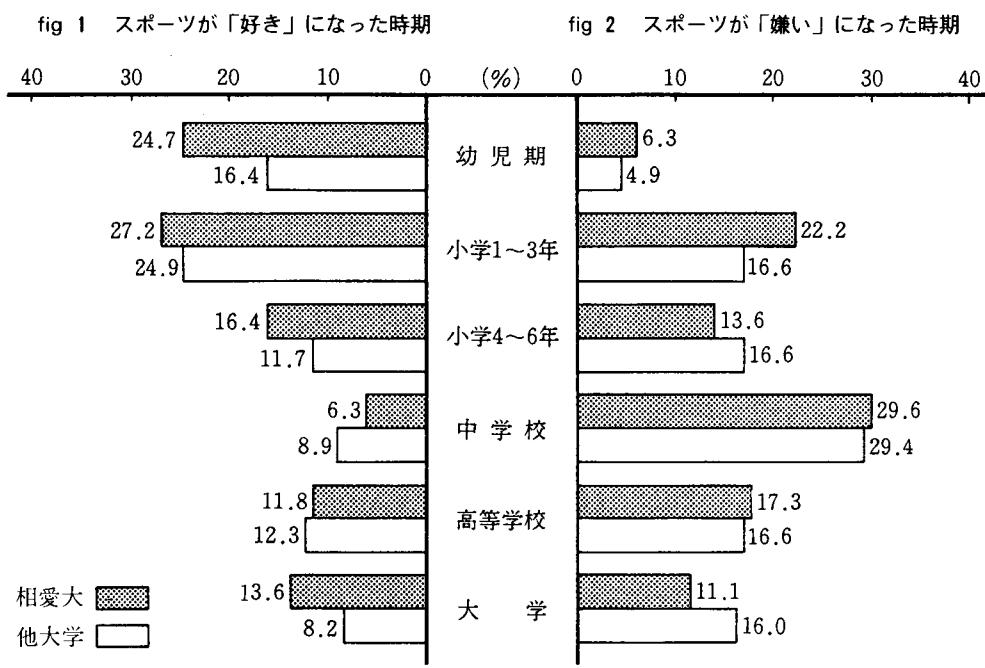
学生たちのスポーツに対する好き嫌いの意識は何時頃形成されたのかを調べた結果をfig 1 に示した。

スポーツが「好き」になった時期は、小学校1年生から3年生までの間（相愛大27.2%、他大学24.9%）、次に幼児期（相愛大24.7%、他大学16.4%）であり、第3に小学校4年生から6年生の時期（相愛大16.4%、他大学11.7%）であった。

本学と他大学の各時期の割合にその差が見られるものの、学生がスポーツ好きになる時期は小学生の時期以前といえる。

このようにみると、幼少年期におけるスポーツ指導がいかに大切であるかがわかる。

また、スポーツが「嫌い」と感じた時期についての結果を fig 2 に示した。スポーツが嫌いになった時期は中学校時代が一番多く（本学29.6%、他大学29.4%）次に小学校1年生から3年生頃（本学22.2%、他大学16.6%）であり、第3位に高等学校の時期（本学17.3%、他大学16.6%）であった。



このように、スポーツを好きになる時期は幼児期および小学校低学年の時期であることがわかる。こうしたところから、スポーツの早期教育が叫ばれるところとなる。

幼児期から児童期中期までにおいては、柔軟性、敏捷性、平衡性、協応性等が特に発達すると言われ、この時期に適切なスポーツの指導をすることが大切である。言い換えれば、こうした時期に好きな子供をつくるのがレディネスとの関係から大切であるといえよう。

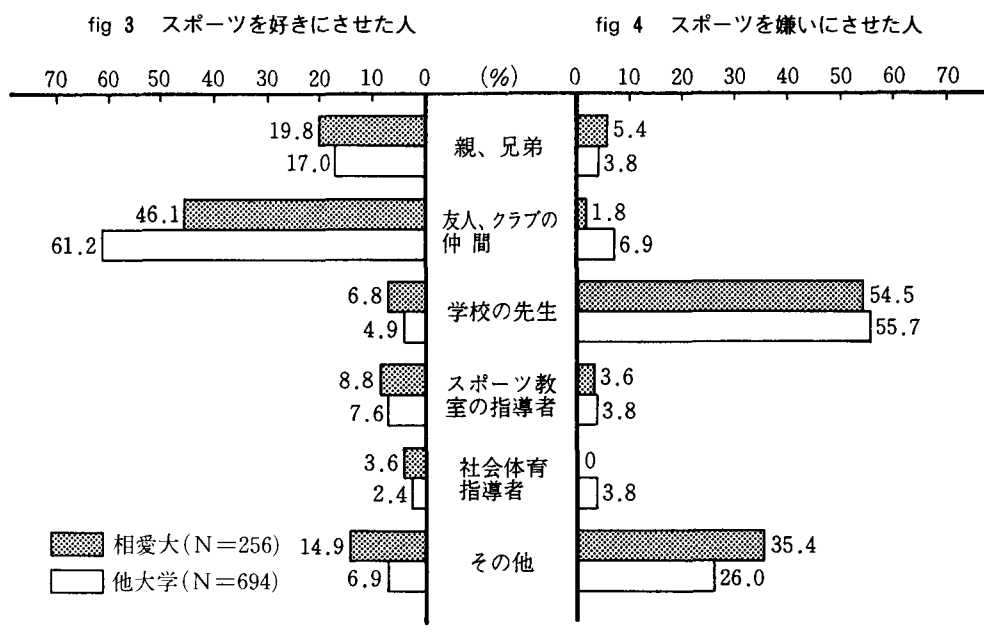
スポーツが「嫌い」になった時期が特に中学校の時期に集中することにも注目すべきである。

そこでこうした実態をふまえて、次にスポーツを好き嫌いにさせたのは誰であるかを考察した。

4. 学生のスポーツに対する態度に与える要因の検討

スポーツを好き嫌いにさせる要因を、遺伝的要因と環境的要因に分けて考えることができる。古くから、「遺伝か環境か」「氏か育ちか」論争が盛んにおこなわれてきた。すなわち、生得説 (nativism) か経験説 (empirism) である。ここではあえてその言及は避け、遺伝された素質が環境の影響を受けつつ発展するシュテルン (Stern, W) の輻輳説に従って研究を進めることにした。³⁾

学生達は、誰れの影響によってスポーツを「好き」になったか「嫌い」になったかを、fig 3. fig 4 に示した。



スポーツを好きにさせた第一位は「友人やスポーツクラブの仲間」(本学46.1%、他大学61.2%)であった。第二位は「親、兄弟」(本学19.8%、他大学17.0%)であった。友人やスポーツクラブの仲間、また、親、兄弟の影響力が大きいことが明らかにされる。

スポーツを嫌いにさせた第1位は「学校の先生」(本学54.5%、他大学55.7%)と、両者とも50%以上の高率を示した。嫌いになった時期を考慮すると、特に中学校の体育、スポーツの在り方が強く影響していることがわかる。

以上の結果から、スポーツを好きにさせた人は友人やクラブの仲間であり、子供たちは、遊びの中でスポーツに親しんでいるといえる。また、スポーツを嫌いにさせた人が主に中

学校の教師であったことに見られるように、教育に携わる者としてさらに言及しないわけにはいかない。

そこで、中学校時代にスポーツをするのが嫌いになった数人の学生に、面接調査する機会を得た。彼女らは、中学校の体育、スポーツを担当する教師の指導理念に対して強い不満を持っており、技術の上手、下手を評価するだけで、彼女等の努力の過程を見ない教師が多すぎると指摘し、先生に強い不満を持っていた。

こうした点を踏まえた上で、スポーツ本来の楽しさを教え、幼児期から児童期、青年期とスポーツを楽しむ質の向上をはかり、さらには、生涯スポーツへと移行させることが大切であろう。

5. スポーツ実践を通して得たもの

①. 心身の調和的発達に関して

学生達が、今日まで実施してきたスポーツと心身の調和的発達との関係について、その効果を Table 4 に示した。

スポーツが心身の調和的発達に「役立つ」と回答した者は69.4%であった。(本学69.2%、他大学69.6%)。また「役立たない」は、両大学とも10%以下の回答(本学9.3%、他大学8.0%)であった。

学生達は、スポーツを実施することで心身の調和的発達がはかれると評価していることが明らかになった。

②. 精神力の強化に関して

スポーツを実施することで、精神力の強化に役立たったかを Table 5 で示した。「役立つ」としたものは全体の49.2% (本学48.9%、他大学49.4%)であった。「どちらともいえない」(本学29.6%、他大学29.7%)「役立たない」(本学21.3%、他大学20.9%)となった。

約半数のものは、精神力の強化に役立ったと回答したが、他の半数はあいまいな回答となり、この調査からは明らかにされなかった。

③. 良き人間関係に関して

スポーツを通じて、良き人間関係を得るのに Table 6 に示した。

「役立つ」かを本学(56.6%)と他大学(62.2%)とに6.2ポイントの差が認められたが、半数以上の学生がスポーツを通じて、良き人間関係が得られるとした。

④. 人格形成について

スポーツと人格形成との関係を Table 7 に示した。

「役立つ」としたものは本学35.0%、他大学41.6%であった。両者に6.6ポイントの差がみとめられた。また「どちらともいえない」は40%（本学40.1%、他大学39.2%）となり、「役立たない」21.9%（本学24.8%、他大学18.9%）と全体にばらついた回答であった。

これらの結果からいえることは、スポーツを実施することが、即、人格形成につながるとは考えていないことが明らかにされた。

⑤. 体力増強について

スポーツ実施と、体力増強との関係を Table 8 に示した。

スポーツが体力増強に役立つと回答したものは、本学73.7%、他大学72.8%であった。学生はスポーツを通じて体力増強がはかれるとポジティブな評価を下している。

⑥. 健康の維持増進や疾病の防止に関して

スポーツが健康の維持増進や疾病防止に役立つと考えているかを Table 9 に示した。

「役立つ」（本学59.8%、他大学57.0%）としたものは全体の58.4%であった。およそ6割近い学生が、ポジティブな評価をしていた。「どちらともいえない」あるいは「役立たない」としたものには、さらにその理由を深く調査することで今後の指導の課題が得られるものと思われる。

Table 4 心身の調和的発達

	役立つと思う		どちらともいえない		役立たない	
	N	%	N	%	N	%
本学	259	69.2	80	21.3	35	9.3
他大学	589	69.6	189	22.3	68	8.0

Table 5 精神力の強化について

	役立つと思う		どちらともいえない		役立たない	
	N	%	N	%	N	%
本学	183	48.9	111	29.6	80	21.3
他大学	418	49.4	251	29.7	177	20.9

Table 6 良き人間関係について

	役立つと思う		どちらともいえない		役立たない	
	N	%	N	%	N	%
本学	212	56.6	110	29.4	52	13.9
他大学	526	62.2	237	28.0	82	9.7

Table 7 人格形成について

	役立つと思う		どちらともいえない		役立たない	
	N	%	N	%	N	%
本学	131	35.0	150	40.1	93	24.8
他大学	352	41.6	332	39.2	160	18.9

Table 8 体力増強

	役立つと思う		どちらともいえない		役立たない	
	N	%	N	%	N	%
本学	276	73.7	63	16.8	35	9.3
他大学	616	72.8	136	16.0	94	11.1

Table 9 健康維持増進や疾病防止について

	役立つと思う		どちらともいえない		役立たない	
	N	%	N	%	N	%
本学	224	59.8	92	24.5	58	15.5
他大学	481	57.0	229	27.1	133	15.7

以上、スポーツを通して得られる、健康、体力の増強、人格の形成等、6項目について本学と他大学の回答を検討した。両者には、大差は見られず、本学の学生も他大学学生同様なスポーツに対する態度を示していることが明らかとなった。

6. スポーツに対する態度とスポーツの効果との関係

① スポーツの好き嫌いとは心身の調和的発達との関係

スポーツの好き嫌いとは心身の調和的発達との関係を Table 9-1に示した。クロス集計をカイ自乗検定したところ、0.1%水準で有意な関連が認められた。

Table 9-1 スポーツの好き嫌いとは心身の調和的発達との関係

		心身の調和的発達						計
		役立つ		どちらとも いえない		役立たない		
		N	%	N	%	N	%	
ス ポ ー ツ	好 き	228	72.4	68	21.6	19	6.0	315
	嫌 い	31	52.5	12	20.3	16	27.1	59
計		259		80		35		374

$$\chi^2 = 26.47 \quad DF = 2 \quad P < 0.001 ***$$

スポーツが好きでそれが心身の調和的発達に「役立つ」と回答したものは72.4%で、スポーツが嫌いで「役立つ」と答えたものは52.5%であった。反対に、スポーツが好きでそれが心身の調和的発達に「役立たない」としたものは6.0%、スポーツが嫌いで「役立たない」と答えたものは27.1%に及んだ。スポーツ好きな人はスポーツが「心身の調和的発達」に役立つと考えていることがわかる。

以上の結果から、スポーツの好き嫌いの違いによってスポーツが心身の調和的発達に役立つかどうかの評価も違うことがわかる。特に嫌いなものは、「役立たない」とする割合が高いことから、学生に対しては現在のスポーツ指導の場においてスポーツ好きにさせる必要があると思われる。

② スポーツの好き嫌いとは精神力の強化との関係

スポーツの好き嫌いとは精神力の強化との関係を Table 9-2に示した。

検定の結果5%水準の有意性が認められた。

スポーツが好きでそれが精神力の強化に「役立つ」と回答した者は、51.7%、スポーツが嫌いで「役立つ」とした者は33.9%であった。また好きで精神力の強化に「役立たない」

と答えた者は19.7%、嫌いで「役立たない」とした者は30.5%であった。

これらの結果から、スポーツが好きなのはそれが精神力の強化に役立つと考え、嫌いな者は役立たないと考える傾向が強いことがわかる。

スポーツに対する態度の違いがそうした評価に与える程度が違うことから、学生の生活に大きな影響を与えるものと思われる。

Table 9-2 スポーツの好き嫌いと精神力の強化との関係

		精神力の強化						計
		役立つ		どちらとも いえない		役立たない		
		N	%	N	%	N	%	
ス ポ ー ツ	好き	163	51.7	90	28.6	62	19.7	315
	嫌い	20	33.9	21	35.6	18	30.5	59
計		183		111		80		374

$$\chi^2 = 6.78 \quad DF = 2 \quad P < 0.05^*$$

③ スポーツの好き嫌いと良き人間関係との関係

スポーツを行うことで良き人間関係を得ることが出来るかをスポーツの好き嫌い別にクロス集計した。Table 9-3をカイ自乗検定したところ0.1%水準で有意な関係が認められた。

スポーツが好きでそれが良き人間関係に役立つとした者は60.3%、スポーツ嫌いで「役立つ」とした者は37.3%であった。また、スポーツが好きで良き人間関係に「役立たない」は10.2%、スポーツが嫌いで「役立たない」は33.9%の回答であった。

スポーツが好きなのほどスポーツを通して良き人間関係が得られるとする傾向にあるといえる。

Table 9-3 スポーツの好き嫌いと良き人間関係との関係

		良き人間関係						計
		役立つ		どちらとも いえない		役立たない		
		N	%	N	%	N	%	
ス ポ ー ツ	好き	190	60.3	93	29.5	32	10.2	315
	嫌い	22	37.3	17	28.8	20	33.9	59
計		212		110		52		374

$$\chi^2 = 24.80 \quad DF = 2 \quad P < 0.001 \text{ ***}$$

④ スポーツの好き嫌いとう人格形成との関係

スポーツが人格形成に「役立つ」のか、「役立たない」のかと「好き嫌い」との関係を Table 9-4に示した。

χ^2 検定の結果1%水準で有意な関係が認められた。

スポーツが好きで人格形成に「役立つ」と回答した者は、38.4%で嫌いで人格形成に「役立つ」とした者は16.9%であった。また、スポーツが好きでそれが人格形成に「役立たない」とする者は22.2%、嫌いで「役立たない」は39.0%の回答であった。これらの結果から、スポーツが好きなた者ほどそれが人格形成に役立つと考え、嫌いな者ほど役立たないと考えている傾向にあった。

Table 9-4 スポーツの好き嫌いとう人格の形成との関係

		人格の形成						計
		役立つ		どちらとも いえない		役立たない		
		N	%	N	%	N	%	
ス ポ ー ツ	好き	121	38.4	124	39.4	70	22.2	315
	嫌い	10	16.9	26	44.1	23	39.0	59
計		131		150		93		374

$$\chi^2 = 12.42 \quad DF = 2 \quad P < 0.01^{**}$$

⑤ スポーツの好き嫌いとう体力増強との関係

スポーツの好き嫌いとう体力の増強との関係を Table 9-5に示した。

Table 9-5 スポーツの好き嫌いとう体力の増強との関係

		体力の増強						計
		役立つ		どちらとも いえない		役立たない		
		N	%	N	%	N	%	
ス ポ ー ツ	好き	247	78.4	49	15.6	19	6.0	315
	嫌い	29	49.2	14	23.7	16	27.1	59
計		276		63		35		374

$$\chi^2 = 31.35 \quad DF = 2 \quad P < 0.001^{***}$$

体力の増強とうスポーツの好き嫌いとうをクロスさせたところ0.1%水準で有意な関係が認められた。

スポーツが好きでそれが体力の増強に「役立つ」とした者は78.4%、嫌いで「役立つ」とした者は49.2%、好きで「役立たない」とした者は6.0%、嫌いで「役立たない」とした者は27.1%であった。スポーツが好きな者の約8割が、嫌いな者の5割が体力の増強に役立つと考えていることがわかる。スポーツ嫌いの内約3割がスポーツ実践して得られる体力の増強を認めていない現状をおさえておく必要があると思われる。

⑥ スポーツの好き嫌い与健康の維持増進や疾病の防止との関係

スポーツの好き嫌い与健康の維持増進や疾病の防止の関係を Table 9-6に示した。

Table 9-6 スポーツの好き嫌い与健康の維持増進や疾病防止との関係

		健康の維持増進や疾病防止						計
		役立つ		どちらとも いえない		役立たない		
		N	%	N	%	N	%	
ス ポ ー ツ	好き	197	62.5	79	25.1	39	12.4	315
	嫌い	27	45.8	13	22.0	19	32.2	59
計		224		92		58		374

$$\chi^2 = 15.11 \quad DF = 2 \quad P < 0.001 \quad ***$$

それらの結果0.1%水準で有意な関係が認められた。

スポーツが好きで「役立つ」とした者は62.5%、嫌いで「役立つ」とした者は45.8%、スポーツが好きで「役立たない」とした者は12.4%、嫌いで「役立たない」とした者は32.2%となった。

スポーツが健康の維持増進や疾病の防止に役立つと思う者が過半数を占める中で、スポーツ嫌いの者の内約3割強が役立たないとし、その効用を認めていないことをみると、いかにスポーツ好きにさせるかが大切であるかが伺える。

以上の検定結果からいえることは、スポーツを同じ時間、同じ場所で実施していても、学習する側の態度によってその効果が左右されることが明確にされた。

学習者が外的動機づけによって学習を始めたとしても、スポーツ実施の段階で内的動機づけがなければその態度もちがうことから、内的動機づけが大切であるといえる。そうしたスポーツ好きにさせる内的動機づけが彼女らの人生に大きな影響を与えることはいうまでもない。従って1人でも多くの学生をスポーツ好きにさせる方法と指導の在り方が今後の課題とされよう。

要 約

女子学生のスポーツに対する態度が学習効果に及ぼす影響を検討するため本学学生の1、2回生と、他大学の1、2回生を対象として調査を実施し考察した結果は次のごとく要約することができる。

本学学生は、他大学学生同様、約80%がスポーツの価値を認め、スポーツに対してポジティブな態度を示した。

スポーツ好きな者はその理由を「友人と自由にのんびり出来るから」「おもしろいから」「思いきりエネルギーを発散させることができるから」とし、嫌いな者は、「下手だから」「体力がないから」を理由にしていた。

スポーツが好きになる時期は、幼児期から小学校低学年の頃が一番多く、嫌いになる時期は、中学校の時が最も高く、次いで小学校低学年の時期、高等学校期の順であった。

両者それぞれの時期の適切な指導が望まれる。

スポーツを好きにさせるのは、友人やクラブの仲間であり、次いで親、兄弟である。また嫌いにさせるのは学校の教師が最も高く、再考が望まれる。

スポーツに対する態度とスポーツ効果との関係では、スポーツ好きの学生は、心身の調和的発達、精神力の強化、良き人間関係、人格の形成、体力の増強、健康の維持増進や疾病の予防等のすべての項目においてプラス評価し、嫌いな学生はその逆のマイナス評価をしている傾向にあった。すなわち、スポーツ好きの学生は、スポーツの効果を認め実践しているが、嫌いな学生はその効果を認めていないといえよう。

以上のように、スポーツに対する態度によって学生のスポーツ学習効果に及ぼす影響が違うことから、幼少年の時期以降のスポーツ指導、特に学校体育におけるスポーツ学習の場における指導法の確立が強く望まれる。

こうしたスポーツ学習の効果の課題を明確にし、それらを解決していくことがスポーツを指導する立場にある者の課題であるといえよう。

最後にこの論文にたいして今回特別研究助成を頂き感謝している。

参 考 文 献

- 1) 長野孝男、山田文男 (1900年)「女子学生の体力格差から見た体育、スポーツに対する意識構造の相違」第41回日本体育学会発表 (体育科教育学)
- 2) 長野孝男、神野稔、山田文男 (1991年)「女子学生の体育、スポーツに対する意識構造の相違」大阪体育学研究 No.28.29. OSAKA RESEARCH JOURNAL OF PHYSICA EDUCATION NO.28.29 April 1991.
- 3) 鷹野健次他編「体育心理学研究」(身体運動の心理学) 杏林書院
- 4) 江刺正吾編「学生の生活とスポーツ」道和書院